

## プロローグ 太陽の赤い光芒

バイクタクシーのエンジン音が、暗い街の中に響き渡っていく。夜明けは迫っていたが、空にはまだ無数の星がまたたいていた。

今朝は雲がなく、日の出を写すには最高の条件だった。僕は、バイクの荷台にまたがりながら、アンコール・ワットの巨大な塔の先端からあふれ出る太陽の光芒を想像した。

シムリアアップの町を抜けると、バイクはスピードを上げた。灌木が生い茂る原野が続く。自転車に乗った農民たちの一団が、ライトもつけずひっそりと走っている。

やがて樹林帯の中に入ると、入場料を徴収する小屋の明かりが見えてきた。ここから奥は、八〇〇年以上も昔の遺跡が建ち並ぶ古代カンボジアの王都、アンコール文明の中心地となった土地だ。料金所を出ると数分でアンコール・ワットになる。

シムリアアップのホテルから約三〇分で、西側の正面入り口に到着した。まだ人の気配はなく、入り口前の駐車場には、車やバイクが一台も停まっていなかった。

ポケットライトで足元を照らしながら歩きます。濠に架かる石橋を渡り終わると、黒い口を開けた西楼門が不気味に立ち塞がっている。踏み込むと、コウモリの糞のきついアンモニア臭が鼻を突いた。

明るければ、西楼門を抜け出た瞬間、まぶしいほどに視野が広がって、まっすぐのびた参道の先に圧倒的な高さの神殿が目飛び込んでくるのだが、いまはまだすべてが闇に沈んでいる。夜が明けるには二〇分ほ





満月に浮かんだアンコール・ワットの本殿

ど時間があつた。本殿にそびえる地上六五メートルの中心塔と左右の小塔だけが、影のような黒いスカイラインを夜空に描いている。

西楼門をくぐつてすぐの参道に三脚を立て、カメラをセットして一八〇ミリの望遠レンズを装着し、中心塔に向けて日の出を待った。三日前からこの場所と同じことを繰り返しているが、日の出の光景はまだ一度も撮影できないでいた。雨季なので、どうしても太陽が厚い雲に遮られてしまうのだ。しかし、今日は星空が広がっている。中心塔の後ろにも雲はなかった。

アンコールには主要な遺跡だけでも六〇基以上あるが、この中で正面が西に向いているのはアンコール・ワットだけである。ほかは、すべて東に向いて建っている。

この理由については、五〇年前に高名な学者同士の論争があり、「アンコール・ワットは神を祀った神殿ではあるが、王の死後に墳墓とする目的があつたため、死後と関係深い西に向けて建てられたのだ」という結論になつた。これがいまでも定説として語られている。

ところが、アンコールの地図を眺めていると面白いことに気が付いた。春分と秋分の日の太陽は真東から昇ってくる。だとしたらこの日、東を背にして建っているアンコール・ワットを眺めれば、太陽は神殿の真ん中から昇ってくることになる。しかも神殿の中心には、地上六五メートルの巨大な塔がそびえているのだ。僕は塔の先端から一気にあふれ出る赤い光芒を思い描いた。

だが、アンコール遺跡を紹介したこの本を読んでみても、春分や秋分には触れていなかった。取り立てて書くほどのことでもないのだろうか。しかし、中心塔の先端からあふれ出る赤い光芒は、僕の脳裏に日に日に魅力的になって膨らみだし、ついに、秋分の日に合わせてやって来てしまった。



中心塔にある拝殿から見下ろした西の参道と西楼門

東の地平がかすかに明るくなった。見詰めていると、明るさが確実に増してきて上空にも広がっていく。二つの小塔を左右に従えた中心塔が、くつきりシルエットになり、浮かび上がった。すかさずカメラのフアインダーを覗き、レンズの向きを修正してピントを確認した。

アンコール・ワットの構造物（濠、境内、参道、回廊、本殿など）は古代インドの神殿建築法に則っている。どの面をとっても東西・南北軸に沿っている。そのため、参道の中央に立つて中心塔と向き合つと、正確に東を向くことになる。

地平がさらに明るく輝きだし、東の空の濃紺色が刻々と淡くなっていく。参道の長い石畳も、もうはっきり見えだしていた。

塔の後方に、一片の雲が湧き上がった。そのあとからも、切れ切れの雲が続いてくる。地平線の下にまだ隠れている太陽に照らされて、雲はどれも赤く色付き、紺色の天空に向かつてどんどん上昇していく。そして、赤色から橙色へ、さらに黄色へと、太陽から遠ざかるにしたがって淡い色に変化していった。

天空全体がプリズムを透過した光を散りばめたように、色彩の雄大なドラマが展開しだした（カバー写真）。僕は、レンズを広角にして、しびれながらシャッターを切り続けた。

ところが、塔の後方に一片の雲が停滞したことで、すべてが狂いだした。後続の雲が次々そこに吸い寄せられてダンゴ状になり、塔の後方に厚い雲の層ができてしまったのだ。結局、雲の隙間から陽光が洩れ出たときには、太陽はすでに塔よりも上の位置まで昇ってしまっていた。

九月は雨季の盛りなので、とくに運が悪いというわけではないのだが、結局、滞在した一週間は毎日太陽が雲に遮られ、ドラマチックになるはずの日の出の光景は、片鱗すら見ることができなかった。